

「なぜ」への対応力

お子さんの進学先

小田原準子 さん

開成中学校



小学校高学年時の1日平均学習時間
塾のある日 → 30分以下
塾のない日 → 1時間~1時間半

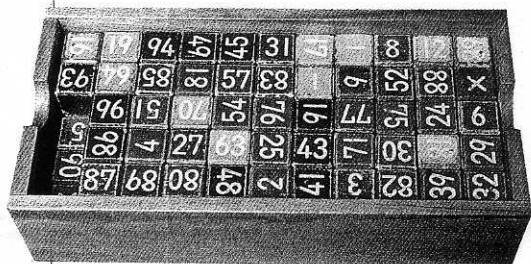
小田原悠朗くん(写真左、現在1年生)。クイズ研究部所属。現在もIMA(22ページ参照)の問題を、毎回、ほぼ全問解き切っているほどの数学好き。この夏も全日本小学生創才セミナーに招待参加して、函館遠征を楽しんでいた



当時おなかが大きかった準子さんが、家から歩いて通える三ツ沢幼稚園を選んだ。弟の崇晃くんが生まれてからは、崇晃くんを抱っこし、悠朗くんと通園した



「リトミック」の発表会風景。音楽を使って頭脳と感性に良い刺激を与え、情緒豊かな人間に育てる。悠朗くんは4歳から12歳までほぼ皆勤だった



1~100までの数字の積み木と「ピタゴラス」に凝った。いろいろなおもちゃを与えても、結局遊ぶのはこの二つだった。数学へのこだわりはここから?

幼稚園の帰りはいつも道草 母子で楽しんだ「なぜなぜ会話」

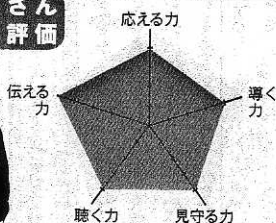
受験、あるいは子育てのためには親もある程度の犠牲を払うのはしかたがない。誰しも思うそんなことを全く考えずに、素晴らしい子育てを実践しているお母さんがいます。
小田原準子さんは、長男の悠朗くんが受験するときも勉強面でのサポートはいつさいせず、生活のペースも変えようとはしませんでした。小

学1年生の弟がいましたが、兄の受験のために何かを我慢する生活は、発達段階ではよくないと判断したのです。
「食事に気をつける、精神的にプレッシャーを与えないという程度のことしか、本当にしなかったんですよ」
生活習慣としては、お手伝いはそのつど、その場で丸投げ。特に役割を決めずに、よく手伝わせました。
「悠朗が塾から帰ると、玄関にゴミ袋が待っていることもありましたが(笑い)。できることは、やらせる。だから、自立心は旺盛ですね」
小田原家では、もう一つ心掛けてきたことがあります。それは家族の

コミュニケーション。
悠朗くんの幼稚園選びのときも、あえてバスではなく徒歩通園を選択。朝は歩数を数えながら登園、帰りは悠朗くんの疑問に答えながら倍以上の時間をかけて歩きました。
悠朗くんの疑問は、たとえば「影。朝と昼とでできる方向が違うのはなぜ、日によって濃さが違うのはなぜ」という質問を、なるべくその場で解消するようにしたのです。ただし準子さんは、いきなり答えはいけません。「何でだと思っ?」から始まって、「お母さんはこう思うけど、どう?」と自分で考えることを優先させました。この「なぜ」への対応力、コミュニ

ケーション力が、悠朗くんの考える力を育み、地アタマの強さを鍛えることになったのです。
父親の伸介さんは、キャッチボールなどの、外遊び担当。もちろん、準子さんとのコミュニケーションも密にとっています。男の子二人兄弟なので、男の立場の意見は、父親に必ず聞くようにしています。口では「任せる」といつている伸介さんも、母親と同じ認識を共有していることは子どもにも伝わり、親がちゃんと話を聞いてくれるという安心感、信頼感につながっているようです。
3歳のときには、カレンダーを見て数字の規則性に気づいたという悠朗くんですが、ガチガチの理数脳に偏らないようにと、準子さんは「リトミック」を始めました。これは音楽を聴いて、そのイメージで絵を描いたり、身体表現をしたりする、子ども向けの能力開発プログラム。
「6年生まで休まず通ったこの教室のおかげで、心身のバランスだけでなく、集中力も養われたと思います」

小田原さんの自己評価



「伝える力」には自信あり

「家族との対話は、もともと意識して心がけているので、「伝える力」は100点だと思います。その他の四つは、はっきりと意識したことはありませんが、日常を考えると、なんとなくこのような対応になっているようです。まあまあということで80点にさせていただきました」